

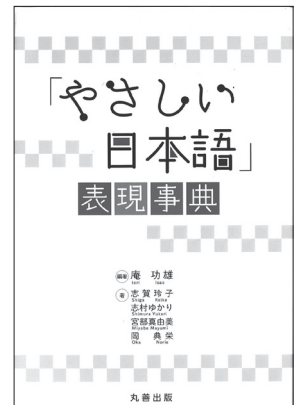
「やさしい日本語」表現事典

庵 功雄 編著

丸善出版
本体3800円+税

表現事典とある通り、全体の3分の2を占める「やさしい日本語の実践」編では、学校、保育所、行政、生活の出来事など日常的に遭遇しそうな82の場面を想定し、やさしい日本語を意識した表現の具体例を対話形式で紹介している。例えば、説明（粗大ゴミの出し方）、助言（病院での受診）、声かけ（駅で迷っている人に）、お知らせ（学校の保護者会開催）など多岐にわたる。会話と文章それぞれで例を示し、文章の場合はイラストや写真のほかるびも振り、使いやすいよう工夫した。

前半は「やさしい日本語の基礎」編にあたり、多文化共生社会を踏まえた幅広い視点に立って、簡潔にわかりやすく説明している。そして、やさしい日本語が実は多層的な構造という特徴を持つことを丁寧に解き明かす。冒頭の「本書をお読みいただくにあたって」を念頭において本書を通読すれば、日本語や日本人、漢字、ルビといった普段、当たり前に使っていた単語の概念を整理し直して、非漢字圏の人の目に漢字表記がどう映るかを想像するようになるに違いない。（華）



バックステージ

◆「給与が以前の勤務先よりも下がった例もある」。民間との人事交流で浮かび上がった課題をたずねたところ、自治体からこんな回答があった。勤務先を選ぶ基準は給与額だけではないが、中途採用では看過できない意見だ。

子どもの教育のためか、両親の介護か、それとも自身の人生の新たな展開を求めているのか。Iターンにせよ、Uターンにせよ、それまでの仕事を辞め、新しい仕事に就くのは、新卒とはまた異なる、大きな希望や決意があったのだろう。

コロナ禍で「3密」を避ける暮らしとして、地方での生活が注目を集めている。仕事がないことが、地方移住の最大のネックとされてきたが、リモートワークなどで状況は大きく変わっている。自治体の採用や人事交流は今後、どのように変わっていくのだろうか。（保）

◆国が地方創生・地域活性化の切り札として重視する「関係人口」。人の移動や接触を制約するコロナ禍という思わぬ伏兵の前で頓挫を余儀なくされるのか、はたまたオンライン化の波に乗って逆に拡大するのか、専門家の間でも見解が分かれている。

国は後者の立場だ。「関係人口の創出・拡大」を第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略の目玉として打ち出した手前もあってか、バーチャルな交流による非接触型の「オンライン関係人口」の出現・存在を強くアピールしている。

しかし、関係人口とは都市部と地域を行き来して関わりを深める人のことだ。リアルな交流のないオンライン上だけの付き合いが、国が目指す「将来の移住」につながるのか。「オンライン関係人口」の行方は、デジタル化時代の人間関係や社会のあり方を占う試金石ともなりそうだ。（かつ）

◆「パブリック 図書館の奇跡」という映画を観て、軽いカルチャーショックを受けた。ホームレスが日中を快適に過ごす場所であることが、所与の事実として描かれていたからだ。日本だったら苦情が殺到するだろう。米国に比べて医療保険や生活保護の制度がしっかりしているからかもしれないが、日本人は総じて社会的弱者に冷たい気がする。

昨年観たドキュメンタリー映画の「ニューヨーク公共図書館」では、世界一とも言われる質を維持するため、予算獲得に向けて職員が知恵を絞るシーンがあった。これも日本の図書館だと想像しにくい。首長が図書館の充実を公約でうたっていればともかく、図書館職員が直接市長や議会に働きかけたら軋轢を生む。2本の映画からは「誰のため」「何のため」という軸をしっかり持ち、最善を尽くすことの重要性を学んだ。（編集長）